

社会的行動における望ましさとは何か？ — 社会的規範の普遍性と可変性に関する研究 (2) —

中村 慎佑*¹ 西迫成一郎*² 森上 幸夫*³ 桑原 尚史*⁴

要 旨

本研究においては、人がいかなる社会的事象または社会的行動を望ましい行動と捉えているのかを問題とした。まず、予備調査においては、どのような社会的行動が望ましいとされているのかを捉えるために社会的規範に関わる項目を収集した。次に、収集されたさまざまな社会的行動の項目に対して、どの程度、望ましいと思われるかについて評定することを求め、そして、どのような社会的行動が望ましいとされるのかについて分析することを目的とした。

因子分析を行った結果として、社会的行動に対する望ましさは、1) 献身, 2) 勤勉, 3) 謙虚, 4) 自制の四つの状況の違いとして分類されることが見出された。

キーワード：社会的望ましさ, 向社会的行動, 社会的価値, 社会的規範

What is Desirability in Social Behavior ? — Universality and Variability in Social Norms (2) —

Shinsuke NAKAMURA Seiichiro NISHISAKO
Yukio MORIKAMI Takashi KUWABARA

Abstract

The purpose of this study was to investigate desirability in social behavior. First, through a pilot examination, we collected 701 situations involving social norms. Next, we employed 436 (218 male and 218 female) undergraduate students as participants. The undergraduate survey participants completed a questionnaire rating the degree of desirability in situations involving social norms. Then, we carried out a factor analysis of 45 situations.

The results showed that desirability in social behavior was classified into four types: (1) devotion, (2) effort, (3) modesty, and (4) self-control.

Key words: social desirability, prosocial behavior, social value, social norms.

*¹ 関西大学大学院総合情報学研究科 *² 相愛大学人文学部

*³ 大阪国際大学人間科学部 *⁴ 関西大学総合情報学部

問題の所在

2011年3月、誰もが忘れることのできない大規模災害が発生した。東日本大震災である。未曾有の大震災から1年以上が経過した今日においても、被災された方々の生活における種々の混乱は未だ収まるところを知らない。それどころか、いまなお多くの人々が遅延する復興、そして曖昧な原発政策によって、さらなる混迷のなかへと投げ込まれているとさえいえるだろう。しかし一方で、そうした動乱のなかにあっても、震災から今日までに多くの人々の助け合いがさまざまな場面でみられていることは、人々の力強さを感じさせるとともに、援助や自己犠牲の精神によって社会が支えられているということを強く示しているといえよう。

震災からおよそ一年後に実施された世論調査では、‘東日本大震災後の日本社会をみて、人と人との絆をどの程度実感しましたか’という問いに対して、‘大いに実感した’と‘ある程度実感した’を合わせると実に86%もの人々が震災後に絆を実感したことが報告されている。また、この世論調査では、絆のイメージについても調査しており、‘絆という言葉聞いて、どんなことを思い浮かべますか（複数回答）’という問いに対して、77%もの人々が絆と聞いて‘助け合い’を思い浮かべると回答している（朝日新聞、2012.3.21.）。こうしたことから、われわれは、いま一度、人と人とのつながり、他者に対する思いやり、さらには他者に対する姿勢のありようといったものを考えてみる必要があるのかもしれない。

しかしながら、われわれが社会をとりまく人々の社会的行動に注意を向ける際には、多くの場合において思いやり（compassion）や社会的望ましさ（social desirability）よりも社会的迷惑（social annoyance）、社会的不公正（social injustice）、および逸脱行動（deviant behavior）とされる種々の社会的事象または社会的行動に目が向けられている。このことは、逸脱行動が生起することにより、社会全体や社会のなかの一部の人々に対して危害が及ぶ可能性があるため、その他の社会的行動よりも注意を向けられてしまうということに一因を求められよう。こうした社会的規範（social norm）に関わる諸問題については、中村・西迫・森上・桑原（2008）が指摘しているように社会的規範や逸脱行動などが、さまざまな観点から多くの研究が行われてきた事実がある（Sherif, 1935; Asch, 1951; Becker, 1963; Goffman, 1963; Hirshi, 1969; Shoham, 1976; Foucault, 1975; 大村・宝月, 1979; Cialdini, 1988; Cialdini, Reno, & Kallgren, 1990; Cialdini, Kallgren, & Reno, 1991; Reno, Cialdini, & Kallgren, 1993）。そうした研究を概観すれば、社会的規範が社会のなかでさまざまな社会的行動に果す役割が大きいことがわかる。

社会的規範がどのように維持されるかについては、メタ規範（metanorms）、支配力（dominance）、内面化（internalization）、抑止（deterrence）、社会的証明（social proof）、メンバーシップ（membership）、法律（law）、そして評判（reputation）といった要因に支えられているという指摘がある（Axelrod, 1986）。また、Giddens（2001）は、このような問題について、どのようなことが重要であるのか、行うに値するのか、そして、望ましいとされるのかを規定して

いる理念がすべての文化において根本的なものであると述べている。価値については、社会のなかで人がやりとりを行う際に、人々に対して意味や指針を与えるものであり、また、規範については、その文化の価値観が反映されるとする。そうしてこれらの価値と規範は、人々が社会のなかで生きていく際に、どのように行動するのかといったことを方向付ける機能をもっているとしている。このことから、社会的規範と社会的価値 (social value) は、緊密に関連している概念であることに加えて、人々の思考や行動に指針を与えるものとみることができる。いかえれば、人々が社会のなかでどのように行動すればよいのか、また、どのような行動が望ましいのかを考える際に重要な役割を果たしているといえよう。

それでは、私たちの社会においては、具体的にどのような社会的行動が望ましいとされ、また要請されているのだろうか。この点については、さまざまな研究領域において、社会的価値、思いやり、援助行動 (helping behavior)、ならびに利他的行動 (altruistic behavior) という形で取り上げられて研究が盛んに行われている (Mussen & Eisenberg-Berg, 1977; 菊池, 1988; Eisenberg & Mussen, 1989)。

ここからは、とくに社会的価値に関わる問題について考えてみたい。Durkheim (1895) は観念や傾向といったものがわれわれ自身によってつくられたのではなく、外的にもたらされている側面があると指摘している。このことから、価値は、生得的に獲得されるのではなく、社会的文化的な影響下のもとに人々の内側に次第に生じていくものと考えられる。

見田 (1996) は、社会的価値に対するアプローチを「[われわれは何を価値あるものとするべきかに関する、主体的実践の指針としての] 客観的価値概念」と「[ひとびとは何を価値あるものと考えているかに関する、客観的研究対象としての] 主観的価値概念」とに区分して捉えている。その上で、価値を「主体の欲求をみだす、客体の性能」と定義している。具体的には、1) 主体とは個人または集団を意味しており、2) 欲求とは、道徳的・芸術的・社会的欲求など広範において、特定のものをのぞましいとみることであり、3) 客体とは、行為や状態など価値判断の対象となるすべてを指し、そして4) 客体の性能とは、望ましきものでも、望まれたものでもなく、望ましきであるという。しかし、価値の定義は多様である。

Rokeach (1973) は、「価値とは、特定の行動様式や存在の究極的な状態が個人的または社会的に反対のものよりも望ましいとする永続的信念である」としている。さらに、価値を最終的にどのような状態が望ましいかとする究極的価値 (terminal value) とどのような行動様式が望ましいかとする道具的価値 (instrumental value) とに大別している。

究極的価値は、「快適な生活 (a comfortable life)」「刺激的な生活 (an exciting life)」「達成感 (sense of accomplishment)」「平和な世界 (a world of peace)」「美しい世界 (a world of beauty)」「平等 (equality)」「家族の安全 (family security)」「自由 (freedom)」「幸福 (happiness)」「内面的な調和 (inner harmony)」「成熟した愛 (mature love)」「国民の安全 (national security)」「楽しみ (pleasure)」「救済 (salvation)」「自尊 (self-respect)」「社会的承認 (social recognition)」「真の友情 (true friendship)」「知恵 (wisdom)」に分類されている。それに対して、道具的価値は、

‘意欲的 (ambitious)’ ‘寛大な (broadminded)’ ‘有能な (capable)’ ‘快活な (cheerful)’ ‘清潔な (clean)’ ‘勇敢な (courageous)’ ‘許す (forgiving)’ ‘助けになる (helpful)’ ‘正直な (honest)’ ‘想像的な (imaginative)’ ‘自立した (independent)’ ‘知的な (intellectual)’ ‘論理的な (logical)’ ‘愛のこもった (loving)’ ‘従順な (obedient)’ ‘礼儀正しい (polite)’ ‘責任のある (responsible)’ ‘自制心のある (self-controlled)’ に分類されている。前者は、快適な生活を送ること、平和な世界であること、あるいは、幸福であることを人生のなかで重要だとする価値である。それに対して後者は、物事に対して意欲的であったり、他者に対して寛大であったり、あるいは、想像的であったりという行動様式に影響を与える価値といえよう。こうした価値の問題については、他にもさまざまな研究が報告されている。

ゴードン・菊池 (1975) は ‘価値とは、個人がそれを重要と考える一般化された行動、あるいは事態を示す概念である’ と定義している。価値は、一般化された行動や事態を指示しているが、価値の対象そのものは価値たりえず、対象がわれわれの満足を充足させるために道具的な働きをもっているという。そして、このような ‘価値を抱くのは「個人」である’ としている。また、価値の測定に関しては、価値の測定に用いられる用語の重要性が指摘されており、‘重要な’ ‘好ましい’ ‘望ましい’ ‘よい’ あるいは ‘重大な’ ‘大切な’ といったさまざまな用語が価値を捉える際に用いられている (菊池, 2008)。そのため、どのような用語を用いて調査を行うかは、入念に検討される必要があるだろう。

近年の価値に関する研究としては、Rokeach (1973) とは異なる観点から価値を分類して捉えた Schwartz (2005) の研究がある。Schwartz (2005) は ‘価値理論では、われわれの生活を導く原則となり、重要性は異なるが、状況による目標を超越した、望ましいこととして価値を定義’ している。さらに、価値を 1) 自立 (self-direction), 2) 刺激 (stimulation), 3) 快楽主義 (hedonism), 4) 達成 (achievement), 5) 権力 (power), 6) 安全 (security), 7) 協調 (conformity), 8) 伝統 (tradition), 9) 博愛 (benevolence), 10) 博識 (universalism) という 10 の価値に分類し、これらの価値の相互の関連性について論じている。

このようにみれば、価値は、どのような行動をとって、どのような状態に達すればよりよい人生または社会を実現することができるのかを示す理念や観念のようなものであると考えられる。人は、さまざまな価値観を有しており、それぞれの人がもつ価値観は一樣ではない。それに加えて、人は、自己のもつ価値観に依拠して、自己や他者の多様な言動について望ましいものかどうかを評価していると考えられる。

以上のように価値は、論者によってさまざまに定義づけられており、その捉え方には幾分かの違いを見出すことができるだろう。これらのことをふまえた上で、価値を定義付けるなら次のようなものとなる。価値は、特定の社会または文化において生起する種々の社会的事象や社会的行動に対する望ましさに関わる判断の指標を与え、そして、人々の多様な思考と行動様式を方向付けるものである。このような社会的価値やよい行いをする必要があるという考えが具体化し行動として顕在化された場合には、それらは援助行動や利他的行動とよばれる。援助行

動や利他的行動のように社会にとって望ましい機能を有する社会的行動の場合には、向社会的行動として包括して捉えられている。Mussen & Eisenberg-Berg (1977) は、向社会的行動が外的な報酬を期待するのではなく、他者を助けようとしたり、他者のためになることをしたりすることであり、そうした行動には、多くの場合、行為者側に損失、自己犠牲、危険がともなうとしている。

こうした他者を助ける向社会的行動には、分配行動、援助行動、贈与行動などが代表的なものとしてあげられるという(菊池, 1988)。また、高木(1982)による向社会的行動の分類では、1) 寄付・奉仕活動、2) 分与行動、3) 緊急時における救助活動、4) 努力を必要とする援助行動、5) 迷い子や遺失者に対する援助行動、6) 社会的弱者に対する援助行動、7) 小さな親切行動が示されている。向社会的行動のいずれにも共通しているのは、援助者にある程度の負担がともなうことである。つまり、実際に向社会的行動をとる際には、どのような場面であれ、時間、労力、あるいは経済的な負担が発生するのである。

援助行動は、先に述べた社会的規範とも関連している。大坊・安藤(1995)は、援助行動がなされる場合には社会的規範が関与しているとし、1) 他者の援助要請に無条件に応じなければならぬと感ずる社会的責任 (social responsibility)、2) 自己が助けられた際に相手に返礼しようとする互惠性 (reciprocity)、3) 自己が損害を与えてしまった他者に対する補償 (compensation)、4) 他者に与えることに価値を見出す贈与 (donation)、5) 自己と他者の利益を能力や努力に比例させようとする衡平性 (equity) などの要因をあげている。

ただし、Mussen & Eisenberg-Berg (1977) や菊池 (1988) が指摘するように、援助者が外的な報酬や他者からの評価を期待して行動する場合には向社会的行動とはいえない。これとは反対に、外的な報酬や他者からの好ましい評価を求めず、さらに自己の犠牲を惜みずして他者に対して行動した場合には、それらの行動を向社会的行動のなかでも利他的行動または愛他的行動という。大澤 (2010) は、利他的行動について '利他的行為とは、要するに与えることである。自分にとって貴重なものを放棄し、他者(たち)のために供することである' としている。また、Dawkins (1989) は、利他的に振る舞うものが自己を犠牲にして受益者たる他者の幸福を高めるような行動をしたならば、それを利他的行動ということができるとする。ここでいう幸福は、生存の機会を示している。たとえば友のために自らの命を投げ出すことや、友のために小さな危険を冒すことを厭わないことは利他的であるという。このようにみれば、向社会的行動のなかでもとくに自己を犠牲にしたり、他者のために危険を冒したりする場合には、それらの行動は利他性に基づく利他的行動である。

ここまで、社会的規範、社会的価値、ならびに向社会的行動が、どのようなものであるか、また、社会的規範や社会的価値やそれに基づく多様な社会的行動が社会のなかで重要な役割を果たしているという点について概観した。それでは、今日の社会においては、人はいかなる社会的行動がみられた際に、その社会的行動を望ましいと捉えるのだろうか。本研究では、いかなる社会的行動が望ましいとみなされているのかを明らかにすることを目的とする。

調 査¹

人は、いかなる社会的事象または社会的行動を望ましいと捉えるのかを検討する。まず、予備調査において、どのような社会的行動が望ましいと考えられているかについて八つの側面から項目を収集した。次に、収集された社会的行動の項目に対して、人々がどの程度尊敬を示すのかを測定し、そして、その内容を整理し検討することを試みた。

方 法

材料の作成：予備調査（大学生男子312名，女子252名の計564名）では，どのような事柄が社会的規範からの逸脱行動と捉えられており，また，どのような事柄が社会的に望ましい行動であると捉えられているのかを調べるため，‘尊重すべき規範’‘守るべき規範’‘大切にすべき規範’‘絶対にしてはいけない行為’‘望ましい行為’‘尊敬すべき行為’‘良い行為’‘守るべき行為’という八つの観点から自由記述で回答を求めた。予備調査で得られた701項目の記述は，調査の整理にあたった4名の合意のもとに，解釈困難な記述を除外し，さらに，重複または類似した記述を整理することによって，45項目に集約した（Table 1）。そして，これらの社会的行動45項目を質問項目として用いた。

材料：社会的行動45項目が記述された質問紙を用いた。

協力者：男子218名，女子218名の計436名の大学生を調査対象とした。

手続き：調査協力者に対して，社会的行動45項目からなる質問項目を呈示し，各項目に記述された社会的行動が，どの程度尊敬できることかについて，‘ひじょうにそう思う’から‘まったくそう思わない’までの7段階で回答を求めた。

結果および考察

社会的行動の各項目の得点を‘ひじょうにそう思う’を6として，‘まったくそう思わない’を0として数値化し，45項目の記述統計量を算出した（Table 2）。まず，平均評定値をみてみると，平均評定値が高い項目には，‘相手の気持ちを考えて行動すること’，‘礼儀をわきまえた態度をとること’，‘家族を大切にすること’，‘困っている人を助けること’，‘人に優しく対応すること’などの項目にみられるように，他者に対して誠実に対応するという項目が多いことが示された。また，‘目標に向かって努力すること’や‘責任を持って行動すること’，‘自分に

1 本調査は，社会的規範を取り扱った中村ら（2007）と中村ら（2008）と同時に調査しており，調査協力者が共通している。また，この調査では，前調査と共通の予備調査で収集された701項目から，社会的規範の調査で用いていない項目が材料として用いられている。

Table 1 調査項目

番号	項目	番号	項目
1	自分から積極的に挨拶をすること	26	一生懸命に仕事をする事
2	相手の気持ちを考えて行動すること	27	整理整頓をすること
3	人に優しく対応すること	28	物が壊れても修理して使うこと
4	礼儀をわきまえた態度をとること	29	環境を大切にすること
5	無配慮な行動をとらないこと	30	車を使わず公共機関を利用すること
6	自分に厳しくすること	31	贅沢をしないで生活すること
7	自慢話をしないこと	32	友達を大切にすること
8	不機嫌でもそれを顔に出さないこと	33	家族を大切にすること
9	自分と違う意見を受け入れること	34	将来のことをしっかりと考えていること
10	自分に非があれば素直に認めること	35	他人の間違った行為に対して注意すること
11	自分の短所を直そうとすること	36	リーダーシップをもって人をまとめること
12	私利私欲にはしらないこと	37	人を見下さないこと
13	役割をきちんと果たすこと	38	早寝早起きをすること
14	頼まれたことを快く引き受けること	39	人知れず誰かの役に立つことをすること
15	言いたいことをうまく伝えること	40	特定の専門分野に詳しいこと
16	責任をもって行動すること	41	自由時間を有効的に使うこと
17	煙草を吸わないこと	42	真面目に勉強をすること
18	人の相談にのること	43	お金を節約すること
19	困っている人を助けること	44	本をたくさん読むこと
20	お年寄りを大切にすること	45	目標に向かって努力すること
21	親が子どもの話をよく聞くこと		
22	他人の悩みを真剣に聞くこと		
23	面倒見が良いこと		
24	電車で人に席を譲ること		
25	目上の人をうやまうこと		

非があればすぐに誤ること’などの自分自身を律するという項目が示された。それに対して、平均評定値が低い項目としては、‘私利私欲にはしらないこと’、‘贅沢をしないで生活すること’、‘煙草を吸わないこと’などの項目にみられるように、社会においてとってはいけないと考えられている社会的行動が多くみられることがうかがえる。

次に、社会的行動45項目に対して、主因子法、プロマックス回転による因子分析をおこなった。その結果、4因子が抽出された。各因子に対して、45項目のうち37項目が.400以上で負荷した。プロマックス回転後の因子負荷量はTable 3に示すとおりである。

第1因子に負荷の高い項目は、‘友達を大切にすること’、‘困っている人を助けること’、‘他人の悩みを真剣に聞くこと’などの項目に象徴されるように、自己の都合よりも、他者や周囲の身近な人々に対しての配慮を示すという項目から構成されている。したがって、この因子を献身として解釈した。

第2因子に負荷の高い項目は、‘自由時間を有効的に使うこと’、‘本をたくさん読むこと’、‘真面目に勉強をすること’などの項目に象徴されるように、社会のさまざまな場面において勤勉に振る舞うという項目から構成されている。そのため、この因子を勤勉として解釈した。

Table 2 記述統計量 (平均評定値の高い順)

順位	番号	項目	Mean	(SD)
1	2	相手の気持ちを考えて行動すること	5.25	(0.99)
2	4	礼儀をわきまえた態度をとること	5.19	(1.04)
3	45	目標に向かって努力すること	5.19	(1.13)
4	33	家族を大切にすること	5.16	(1.11)
5	32	友達を大切にすること	5.04	(1.16)
6	16	責任をもって行動すること	5.02	(1.17)
7	3	人に優しく対応すること	4.98	(1.13)
8	10	自分に非があれば素直に認めること	4.95	(1.19)
9	19	困っている人を助けること	4.85	(1.13)
10	20	お年寄りを大切にすること	4.82	(1.21)
11	34	将来のことをしっかりと考えていること	4.81	(1.26)
12	26	一生懸命に仕事をする	4.79	(1.22)
13	5	無配慮な行動をとらないこと	4.78	(1.22)
14	1	自分から積極的に挨拶をすること	4.76	(1.27)
15	13	役割をきちんと果たすこと	4.69	(1.20)
16	15	言いたいことをうまく伝えること	4.69	(1.28)
17	22	他人の悩みを真剣に聞くこと	4.64	(1.23)
18	29	環境を大切にすること	4.63	(1.29)
19	35	他人の間違った行為に対して注意すること	4.63	(1.24)
20	37	人を見下さないこと	4.61	(1.36)
21	39	人知れず誰かの役に立つことをすること	4.59	(1.33)
22	9	自分と違う意見を受け入れること	4.54	(1.31)
23	11	自分の短所を直そうとすること	4.48	(1.34)
24	21	親が子どもの話をよく聞くこと	4.44	(1.41)
25	24	電車で人に席を譲ること	4.43	(1.37)
26	25	目上の人をうやまうこと	4.33	(1.33)
27	36	リーダーシップをもって人をまとめること	4.31	(1.39)
28	6	自分に厳しくすること	4.31	(1.50)
29	23	面倒見が良いこと	4.20	(1.26)
30	8	不機嫌でもそれを顔に出さないこと	4.16	(1.50)
31	41	自由時間を有効的に使うこと	4.13	(1.49)
32	42	真面目に勉強をすること	4.06	(1.55)
33	27	整理整頓をすること	4.02	(1.42)
34	44	本をたくさん読むこと	4.01	(1.62)
35	12	私利私欲にはしらないこと	4.00	(1.45)
36	18	人の相談にのること	3.96	(1.40)
37	40	特定の専門分野に詳しいこと	3.90	(1.56)
38	14	頼まれたことを快く引き受けること	3.79	(1.43)
39	28	物が壊れても修理して使うこと	3.77	(1.52)
40	43	お金を節約すること	3.76	(1.58)
41	7	自慢話をしないこと	3.45	(1.57)
42	38	早寝早起きをする	3.33	(1.75)
43	31	贅沢をしないで生活すること	3.08	(1.68)
44	30	車を使わず公共機関を利用すること	2.89	(1.69)
45	17	煙草を吸わないこと	2.78	(2.04)

Table 3 因子分析の結果

因子名	番号	項 目	I	II	III	IV
献 身	32	友達を大切にすること	.898	-.120	.108	-.165
	33	家族を大切にすること	.870	-.108	.133	-.219
	20	お年寄りを大切にすること	.786	-.063	.028	-.035
	19	困っている人を助けること	.705	-.085	.095	.047
	26	一生懸命に仕事をする事	.680	.070	.062	-.005
	25	目上の人をうやまうこと	.664	.052	-.072	.091
	22	他人の悩みを真剣に聞くこと	.658	.063	.120	.043
	24	電車で人に席を譲ること	.583	.170	-.121	.085
	21	親が子どもの話をよく聞くこと	.580	.034	.042	.024
	23	面倒見が良いこと	.488	.131	.066	.201
	29	環境を大切にすること	.476	.296	-.068	.032
	18	人の相談にのること	.468	.165	-.045	.162
	13	役割をきちんと果たすこと	.385	-.006	.253	.182
勤 勉	38	早寝早起きをする事	-.018	.710	-.057	-.080
	41	自由時間を有効的に使うこと	-.211	.709	.284	-.087
	43	お金を節約すること	-.038	.696	.078	.015
	30	車を使わず公共機関を利用すること	.019	.692	-.410	.187
	44	本をたくさん読むこと	.002	.685	.107	-.135
	42	真面目に勉強をすること	-.074	.673	.196	-.090
	40	特定の専門分野に詳しいこと	-.047	.614	.132	-.120
	31	贅沢をしないで生活すること	-.064	.598	-.206	.294
	28	物が壊れても修理して使うこと	.149	.578	-.098	.110
	27	整理整頓をすること	.201	.526	.106	-.030
	17	煙草を吸わないこと	.142	.459	-.274	.048
	39	人知れず誰かの役に立つことをすること	.184	.384	.236	-.053
	36	リーダーシップをもって人をまとめること	.058	.323	.259	.055
35	他人の間違った行為に対して注意すること	.187	.251	.165	.041	
謙 虚	4	礼儀をわきまえた態度をとること	.134	-.146	.706	.055
	2	相手の気持ちを考えて行動すること	.146	-.174	.682	.067
	10	自分に非があれば素直に認めること	-.119	-.053	.587	.362
	5	無配慮な行動をとらないこと	.082	-.080	.576	.198
	16	責任をもって行動すること	.253	.089	.462	.046
	1	自分から積極的に挨拶をすること	.287	-.048	.455	-.013
	3	人に優しく対応すること	.186	-.123	.453	.143
	15	言いたいことをうまく伝えること	.006	.244	.442	.070
	45	目標に向かって努力すること	.108	.359	.390	-.199
	34	将来のことをしっかりと考えていること	.101	.359	.361	-.066
自 制	7	自慢話をしないこと	-.026	-.024	-.030	.687
	8	不機嫌でもそれを顔に出さないこと	-.001	-.171	.215	.687
	9	自分と違う意見を受け入れること	-.028	-.109	.204	.594
	12	私利私欲にはしらないこと	.034	.126	.048	.539
	14	頼まれたことを快く引き受けること	.100	.110	.019	.429
	11	自分の短所を直そうとすること	-.067	.171	.272	.410
	6	自分に厳しくすること	-.233	.170	.338	.373
37	人を見下さないこと	.256	.123	.157	.264	
因子間相関	I	献身				
	II	勤勉	0.63			
	III	謙虚	0.66	0.53		
	IV	自制	0.58	0.58	0.52	

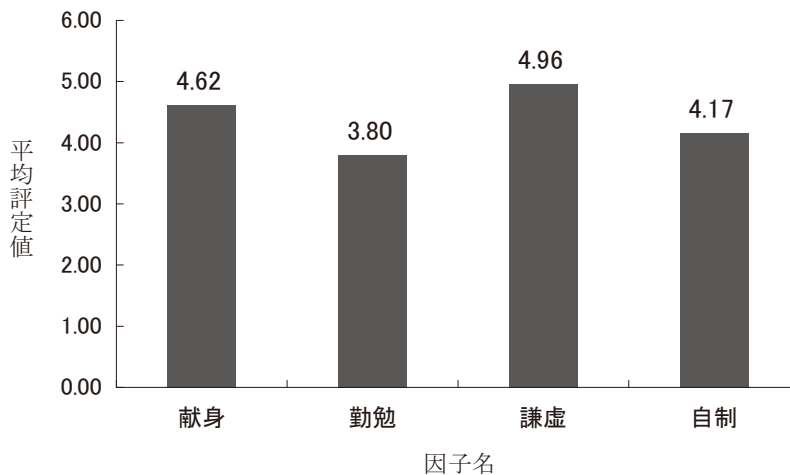


Figure 1. 各因子における平均評定値

第3因子に負荷の高い項目は、‘礼儀をわきまえた態度をとること’、‘自分に非があれば素直に認めること’、‘言いたいことをうまく伝えること’などの項目に象徴されるように、対人場面において他者に対して誠意を持って応対するという項目から構成されている。よって、この因子を謙虚として解釈した。

第4因子に負荷の高い項目は、‘自慢話をしないこと’、‘不機嫌でもそれを顔に出さないこと’、‘私利私欲にはしらないこと’などの項目に象徴されるように、思いのままに行動するのではなく自律的な行動を示すという項目から構成されている。よって、この因子を自制として解釈した。

ここでは、因子ごとの違いをみるために、各因子における記述統計量を算出した (Figure 1)。各因子の平均評定値をみてみると、‘謙虚’という因子がもっとも高く評定されている。次いで、‘献身’という因子、‘自制’という因子、‘勤勉’という因子となっている。このことから、まず、社会的に望ましいと考えられているさまざまな行動のなかでもとくに、他者に対して控えめな対応をとることが大切と思われることがわかる。次に、‘献身’という因子の平均評定値が高いことが示されていることから、他者に対して誠実な対応をすることが大切とされているといえよう。

分析の結果からは、望ましいと考えられている社会的行動が、‘献身’、‘勤勉’、‘謙虚’、ならびに‘自制’という四つの因子から構成されていることが見出された。このことは、人々が社会におけるさまざまな場面でみられる種々の行動に対して望ましさを評価する際には、他者を心から思いやる献身さという水準、努力を惜しまずに一生懸命に振る舞う勤勉さという水準、控えめで誠実に対応する謙虚さという水準、そして、勝手気ままに行動するのではなくしっかりと自己を統制する自制力という水準が重要となることを示している。

ところで、本研究と関連研究である中村ら (2008) は、社会的規範から逸脱行動がいかなる

ものであるかを検討している。そこでは、社会的規範からの逸脱行動には、1) 逸脱の程度が過大で状況の改善が困難な行動を示している‘非人道性’、2) 公共の場面で他者に対する配慮を欠く行動を示している‘反公共性’、そして3) 自己の怠惰な行動を示している‘非勤勉性’の三つの特徴的な行動があるとしている。これらの因子に含まれる行動と、今回の研究で得られた因子に含まれる行動とを比較してみると、本研究の第二因子として見出された‘勤勉’は社会的規範からの逸脱行動として見出された第三因子の‘非勤勉性’と対極的な内容として構成されていることが指摘できる。そのため、ある特定の行動に関しては、当該の行動を適切に履行するか否かによって望ましいか逸脱であるかの判断が二分されているといえよう。

ここからは、既存の向社会的行動に関する研究で示されている項目と本研究で示された項目とを比較検討してみたい。菊池（1988）が作成した向社会的行動尺度（大学生版）では、‘列に並んでいて、急ぐ人のための順番をゆずる’、‘お店で、渡されたおつりが多かったとき、注意してあげる’、‘ころんだ子どもを起こしてやる’、‘あまり親しくない友人にもノートを貸す’、‘気持ちの悪くなった友人を、保健室などにつれていく’などの行動が含まれている。このような行動は、向社会的行動の代表的な事例である。本研究で用いた項目には、近似した項目がいくつかり取り上げられているものの、まったく同様の行動はあまりみられない。その理由は、行動を収集する際に用いた用語の違いに求めることができる。つまり、‘思いやりのある行動’という観点から回答を求めると‘望ましい行為’や‘良い行為’という観点から回答を求めるとでは、それぞれ向社会的行動の側面的に捉えることは可能であるが、向社会的行動の全容を把握することは難しいのである。ゆえに、社会的価値や向社会的行動に関わる問題の全容を把握するためには、今後も多角的な観点から検討していく必要がある。

本研究には、別の問題も残されている。そもそも社会的規範やそれに関わる社会的事象は、社会の変容や評価者の立ち位置によって見方が異なるという問題である。この点については、人々が所属している社会や集団の違い、さまざまな条件の違い、そして、時代や社会の変化により異なることが既に多くの論者によって指摘されている（Durkheim, 1895; Weber, 1922; Merton, 1949; Axelrod, 1986; 川島, 1967; Eisenberg & Mussen, 1989）。これと同様に、利他性についても同じ指摘が可能であろう。すなわち、利己的-利他的は、相対的な基準であるがゆえに、異なる観点から眺めると利己的にも利他的にもなりうるという二面的な性質をもっているのである（大澤, 2010）。そうしたことから、ある社会または集団の成員からは、よいと思われる行為であっても、別の集団の成員からはそうみなされないということも考えられる。また、人々の価値観は、完全に合致するものではなく、ある人からみれば利他的にみえていても、また別の人からみれば利己的にみえてしまう場合もある。それゆえ、社会的規範や社会的価値を巡る問題を取り扱う際には、人々がどのような社会や集団に属し、そこにはいかなる社会的規範があるのか、また、そこではいかなる社会的価値がもたれているのかといった諸問題があることを念頭におかねばならない。それに加えて、どのような社会的行動が社会的に望ましいと考えられているのかを検討するには、経時的变化をとらえていくことも必要と考えられよう。

以上、本研究では、いかなる社会的行動が人々にとって望ましいと考えられているかについて、種々の社会的行動を尊敬することができることかどうかという観点から評価を求めることで、‘献身’、‘勤勉’、‘謙虚’、ならびに‘自制’という四つの類型があることを見出した。そして、さまざまな社会的行動のなかでも、人は、とくに他者を慮って献身的な行動をとることと他者に対して謙虚に振る舞うことを望ましいとみていることが明らかとなった。

【付記】本研究は第1著者が関西大学大学院総合情報学研究科に2007年に提出した修士論文の一部を大幅に加筆修正したものである。また、本研究の一部は日本心理学会第71回大会において発表された。

引用文献

- 朝日新聞 (2012.3.21朝刊). 絆 いま問い直す—震災から1年 本社世論調査
- Asch, S. E. (1951). Effects of group pressure upon the modification and distortion of judgment. In H. Guetzkow (Ed.), *Groups, leadership and men*. Carnegie Press.
- Axelrod, R. (1986). An evolutionary approach to norms. *American Political Science Review*, **80**, 4, 1095-1111.
- Becker, H. S. (1963). *Outsiders: Studies in the sociology of deviance*. New York: The Free Press. (村上直之 (訳) (1978). *アウトサイダーズ—ラベリング理論とは何か* 新泉社)
- Cialdini, R.B. (1988). *Influence: Science and practice* (2nd edition.), Scott, Foresman and Company. (社会行動研究会 (訳) (1991). *影響力の武器* 誠信書房)
- Cialdini, R. B., Kallgren, C. A., & Reno, R. R. (1991). A focus theory of normative conduct: A theoretical refinement and reevaluation of the role of norms in human behavior. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, **24**, 201-234, New York: Academic Press.
- Cialdini, R. B., Reno, R. R., & Kallgren, C. A. (1990). A focus theory of normative conduct: Recycling the concept of norms to reduce littering in public places. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 1015-1026.
- 大坊郁夫・安藤清志 (1995). 援助と攻撃 安藤清志・大坊郁夫・池田謙一 社会心理学 岩波書店 pp.120-141.
- Dawkins, R. (1989). *The selfish gene* [New edition]. Oxford University Press. (日高敏隆・岸由二・羽田節子・垂水雄二 (訳) (1991). *利己的な遺伝子* 紀伊國屋書店)
- Durkheim, É. (1895). *Les règles de la méthode sociologique*. Presses Universitaires de France. (宮島喬 (訳) (1978). *社会学的方法の基準* 岩波文庫)
- Eisenberg, N., & Mussen, P. H. (1989). *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge University Press. (菊池章夫・二宮克美 (訳) (1991). *思いやり行動の発達心理* 金子書房)
- Foucault, M. (1975). *Surveiller et punir: Naissance de la prison*. Gallimard. (田村俣 (訳) (1977). *監獄の誕生—監視と処罰* 新潮社)
- Giddens, A. (2001). *Sociology* [4th edition]. Polity Press. (松尾精文・西岡八郎・藤井達也・小幡正敏・叶堂隆三・立松隆介・内田健 (訳) (2004). *社会学* [第4版] 而立書房)
- Goffman, E. (1963). *Behavior in public places: Notes on the social organization of gatherings*. Free Press. (丸木恵祐・本名信行 (訳) (1980). *集まりの構造—新しい日常行動論を求めて* 誠信書房)
- ゴードン, L. V.・菊池章夫 (1975). *価値の比較社会心理学—理論と測定法* 川島書店
- Hirshi, T. (1969). *Causes of delinquency*. Berkeley: Univ. of California Press.
- 川島武宜 (1967). *日本人の法意識* 岩波新書
- 菊池章夫 (1988). *思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル* 川島書店

- 菊池章夫 (2008). 社会的つながりの心理学—ほくの社会心理学ノート (3) 川島書店
- Merton, R. K. (1949). *Social theory and social structure: Toward the codification of theory and research*. Free Press. (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎 (訳) (1961). 社会理論と社会構造 みすず書房)
- Mussen, P. H. & Eisenberg-Berg, N. (1977). *Roots of caring, sharing, and helping: The development of prosocial behavior in children*. Freeman. (菊池章夫 (訳) (1980). 思いやりの発達心理 金子書房)
- 見田宗介 (1996). 価値意識の理論—欲望と道德の社会学 弘文堂
- 中村慎佑・西迫成一郎・森上幸夫・桑原尚史 (2008). 社会的規範からの逸脱行動の様相と類型—社会的規範の普遍性と可変性に関する研究 (2) 関西大学総合情報学部紀要「情報研究」, **29**, 55-68.
- 大村英昭・宝月誠 (1979). 逸脱の社会学 烙印の構造とアノミー 新曜社
- 大澤真幸 (2010). 二つのミメシス—宮台真司の論を手掛かりにして 大澤真幸・宮台真司. 「正義」について論じます THINKING O 第8号 左右社 pp.76-99.
- Reno, R. R., Cialdini, R. B., & Kallgren, C. A. (1993). The transsituational influence of social norms. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 104-112.
- Schwartz, S. H. (2005). Basic human values: An overview. (<http://segr-did2.fmag.unict.it/Allegati/convegno%207-8-10-05/Schwartzpaper.pdf>) (2012年4月27日閲覧)
- Sherif, M. (1935). A study of some social factors in perception. *Archives of Psychology*, 187.
- Shoham, S. G. (1976). *Social deviance*. New York: Gardner Press. (藤田弘人 (訳) (1990). 逸脱の世界 文化書房博文社)
- 高木修 (1982). 順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学, **23**, 137-156.
- Weber, M. (1922). *Soziologische grundbegriffe, Wirtschaft und gesellschaft*. Tübingen, J. C. B. Mohr. (清水幾太郎 (訳) (1972). 社会学の根本概念 岩波文庫)